

訪問看護ステーションにおける HIV陽性者支援の実践

なないろ訪問看護ステーション
長谷川 泰子



なないろ

2024/3/1



本日の内容

- ① はじめに（事業所紹介）
- ② 事業所の紹介
- ③ 当事業所におけるHIV陽性者の内訳
- ④ HIV陽性者支援の実践について
- ⑤ まとめ

1

はじめに

HIV陽性者支援の実践について

- 他業支援者と同じ点・異なる点
- 支援を開始するまでの準備や体制
- 事業所の体制
- HIV陽性者支援の実践事例

2

事業所の紹介

【名称】 なないろ訪問看護ステーション

【所在】 大阪市都島区

【職員数】 看護師28名 理学療法士10名 言語聴覚士2名
作業療法士3名 事務職5名

【利用者数】 約450名（介護保険：約250名 医療保険：約200名）
自宅看取り1か月に3～5名

【年齢】 0歳から100歳以上まで対象疾患 癌末期・神経難病が多い

2 事業所の紹介

(2022年時)

大阪府下：訪問看護ステーションが1357ヶ所

全国1位の数

小規模の事務所が多く、沢山出来て、沢山なくなる…。

大阪市の都島区

良くも
悪くも

大阪の都市部で

大阪らしいまち

3 当事業所におけるHIV陽性者の内訳

現在
利用者総数
450件

内
HIV陽性者
4件

開業後の全利用者を含めても7件

4

訪問看護ステーションにおける HIV陽性者支援の実践について

- 1 他の疾病をもつ要支援者と同じ点・異なる点
- 2 依頼を受けてから支援を開始するまでの準備や体制
- 3 支援を開始してからの事業所の体制
- 4 訪問看護ステーションとしてのHIV陽性者支援の実践事例

1

他の疾病をもつ要支援者と 同じ点・異なる点

《基本的には同じ》

看護師として 確認すること

- ◆ 病状の経過（血液データ含め）
- ◆ 現在の病状・病態
- ◆ 病気に関する意思
（誰に病名を明かしているか）
- ◆ 必要な医療的ケアや課題

訪問看護師として 確認したいこと

- ◆ 療養生活において
考えられる課題
- ◆ 療養生活において
望まれる支援体制

2

依頼を受けてから支援を開始するまでの準備や体制

自立支援医療
(更生医療) の利用



訪問看護は
まずはここを確認！

- ◆ HIV陽性：週3回までの訪問看護の利用可能
- ◆ AIDS(後天性免疫不全症候群)：毎日1日3回までの利用可能

ですが、要注意！ 高齢のHIV陽性者の場合・・・

- HIV陽性者→介護保険優先) 医療保険
- AIDS→医療保険優先【別表7】

◆ 介護保険申請のタイミング (介護か医療か?)

◆ ADL・IADLがほぼ自立している場合は介護度が低く...

何が
支援として必要か
評価を正しくする

3

支援を開始してからの 事業所の体制

HIV陽性者・AIDSの利用者受け入れに対して

スタッフ側の反応

- ➡ HIV・AIDSケースを経験した看護師は少数
 - ・ 他患者と違う点、勉強したほうがいい点を教えてほしい
- ➡ 正しい情報を伝える
 - ・ スタンダードプリコーションの確認
コロナ等の経験
- ➡ 訪問拒否する看護師はいまのところいない

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（1）

- 利用者 : 47歳男性
- 主傷病名 : 肝細胞癌末期・HIV陽性・肝硬変
- 既往歴 : 25歳 梅毒
40歳 HIV・HBVと診断（いつからかは不明）
44歳 肝細胞癌（腹腔鏡下肝左葉切除）
47歳 脳梗塞 肝性脳症

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（1）

《訪問看護依頼の目的・きっかけ》

- ①体調確認（肝性脳症を繰り返すリスク高）
- ②排便コントロール
- ③薬剤管理（自己管理中）

- 肝性脳症を繰り返すリスクが高いため体調確認・排便コントロール目的にて訪問開始。
- 肝細胞癌末期であるため療養先を検討していたが受け入れ病院みつからず本人の希望もあり自宅退院へ

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（1）

《介入当初の課題》

①肝性脳症を繰り返すリスク高く病状が不安定

- 独居であり症状発症時に連絡できるか不明（入院時は記憶なし）

②療養場所の受け入れ

- HIV陽性のため緩和ケア病棟をもつ病院の受け入れを広く探していたがなかなか見つからない

③支援者が少なく本人は漠然とした不安

- もともと家族とは長らく疎遠
- HIV陽性については遠方に住む姉のみ知っている
- 支援団体も紹介されているが活用歴がほぼない

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（1）

《現在》

①現在週2回定期的に訪問看護介入中

- ◆ 2年を経過した現在も病状はやや小康状態で経過

②近隣の病院が受け入れ了承され面談も済

- ◆ 病院側はHIV陽性者は初で今後は受け入れ予定なし
- ◆ ご本人はできる限り家で過ごしたいという希望

③現在訪問看護週2回のみ

- ◆ 現在は多数の受け入れも良好
- ◆ ADL・IADLともに自立している

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（2）

- 利用者 : 75歳男性
- 主傷病名 : HIV陽性 大腸憩室
- 既往歴 : 高血圧 大腸憩室出血後(複数回)
B型肝炎 梅毒 脳梗塞後遺症
逆流性食道炎 前立腺肥大

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（2）

《訪問看護依頼の目的・きっかけ》

- ①体調管理・下血時の対応
- ②薬剤管理(眠剤の多数の残薬あり)
- ③リハビリ

- ◆ 若い頃から複数の眠剤を使用し依存も強い
- ◆ 抗HIV薬は飲み忘れない、と本人の弁(室内乱雑で未確認)
- ◆ 要介護 2

訪問介護週5回 訪問入浴週1回 福祉用具 訪問看護週1回 往診

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（2）

《課題》

- ①左片麻痺を認め転倒を繰り返しており、
特に夜間に何度も救急車を呼ぶ
- ②過剰内服する傾向にあり薬剤管理方法が難しい

4

訪問看護ステーションとしての HIV陽性者支援の実践事例（2）

《現在》

①訪問介護を週5回に増やし訪問看護は週1回に
→精神的な安定が図れ救急車を呼ぶ回数は激減した。

②介護保険は常に限界状態

→介護依存度は高く点数が常に不足気味。

眠剤内服したあとの転倒トラブルはしばしばあり課題継続
薬剤師による居宅療養指導の算定を検討

③施設入所は嫌（最期まで自宅でと希望）

→今後も状態に合わせたサービスの見直しが必要

5 まとめ

◎支援していくうえでの課題

- ・主疾患や状態に応じて連携する機関の課題を早期に共有する
- ・制度をいつ・どのタイミングで活用するかを早期に把握
- ・更生・育成医療の事業者申請のタイミングを理解

◎支援経過のなかですべておいてほしいこと

- ・特別な物品の準備は不要。
→スタンダードプリコーションに関する正しい知識の理解は大切
- ・限られたコミュニティで過ごしてきた割合が多いことを理解。
→支援者（家族・友人）が少ない可能性があることを理解
意思の確認大切。



ご清聴ありがとうございました